現代政治のイッシュー（国内外喫緊の政治的諸課題 AB）

沖縄研修班報告書

現地研修期間　２０１９年８月１５日～２２日

はじめに

今年度、４年目となる沖縄研修は、政治学科の５人の学生による７泊８日の行程で実施した。少人数での研修となり、機動力も高まったので、宮古島まで足を延ばして、通算二回目となる離島研修（第一回目は与那国島であった）を開催した。参加者は以下のとおりである。

〇参加者リスト

■教職員

武田知己（8 月 15 日～22 日）

藏田明子（8 月 15 日～22 日）

松本美帆（8 月 15 日～17 日）

■学生

政治学科 2 年　石﨑雄祐（8 月 15 日～22 日）

政治学科 3 年　山本瑚心（8 月 15 日～22 日）

政治学科 3 年　野口賢大（8 月 15 日～22 日）

政治学科 3 年　星隼也（8 月 15 日～22 日）

政治学科 3 年　新城葉月（8 月 15 日～22 日）

行程は以下の通りであった。

〇行程表

■8 月 15 日(木)

10;30　羽田第２ターミナル「ANA 受付」付近集合

12:55　羽田空港発　ANA473 便→15:30　那覇空港着

17:00　那覇空港発　JTA571 便→17:50　宮古島着

18:50　ゲストハウス　hanahana

住所：〒906-0015 沖縄県宮古島市平良久貝 50-1

■8 月 16 日（金）

14:00　宮古島市役所視察（下地島空港・地下ダム資料館視察）

17:30　宮古毎日新聞記者へのヒアリング

■8 月 17 日（土）

10:00　hanahana チェックアウト

11:55　宮古島発　JTA558 便→12:45　那覇空港着

14:00　月桃チェックイン

住所：〒900-0014 沖縄県那覇市松尾１丁目１６－２４

14:30　首里城見学
17:00　沖縄タイムス記者へのヒアリング
■8 月 18 日（日）
09:00　月桃出発
09:40　嘉数台視察→沖縄国際大学の墜落現場視察
13:00　宜野湾市議などへのヒアリング
15:00　緑ヶ丘保育園・普天間第二小学校保護者ヒアリング

■8 月 19 日（月）
09:00　月桃出発
09:30　那覇駐屯地視察
10:45　自衛官（大東 OB）へのヒアリング
12:00　戦跡（海軍司令部壕、前田高地）視察
17:30　安里付近で解散

■8 月 20 日（火）
09:00　月桃出発　読谷（チビチリガマ）・嘉手納基地・辺野古視察
16:00　琉球大学と合同ゼミ

■8 月 21 日（水）
09:00　基地返還跡地の再利用について視察
14:00　元 Stars&Stripes 記者へのヒアリング

17:30　宜野湾市議などへのヒアリング

■8 月 22 日（木）
03:35　那覇空港発　ANA1000 便→05:55　羽田空港着

■宮古島毎日新聞記者へのヒアリング

ヒアリングの狙い

・宮古島から見た沖縄県の基地問題についての意見を聞き、地域によっての意見や考え方の違いを知る。地域新聞の立ち位置や見解を知り、沖縄県の諸問題に対する視野を広げる。

ヒアリングの感想および研修に参加した感想

・このヒアリングを行う前は宮古島などの島々も一括りに沖縄県という認識を持っていたが、そうではなく、島々と本島の間には思いのほかギャップがあり、住民の考え方にも差があった。実際に訪れてみることで見えてくることや知った気でいた情報の勘違いに気づくことができた。この研修を終えてから情報に対する視野が広がり、地域や見解の立場によって伝わり方が大きく変わることがわかり、一つのニュースに対しても様々な見方ができるようになったと思う。とても実りのある研修であった。

次期参加者へのアドバイス

・ヒアリングを行うにあたって自分の興味や疑問を全てぶつけて欲しいと思う。「わからない」「知らない」は学生の特権なので、それを大いに使って「わかりたい」「知りたい」の思いを前面に出して探究心持って取り組んで欲しいと思う。

■沖縄タイムス記者へのヒアリング

ヒアリングの狙い

・沖縄県基地問題の最前線で記事を書き続ける記者の方に話を聞き、起こっている問題の現実を知り、自分なりの解決策を模索する。

ヒアリングの感想および研修に参加した感想

テレビのニュースだけでは知ることのできない問題の現実やスクープの背景を知ることで、どこか客観視していた問題が沖縄だけのものではなく自分たちの問題だと再認識できた。解決策を見いだすことは難しいが、沖縄の人だけが考えなければいけない問題ではなく日本全体の問題ということを発信していかなければならないと思った。

■宜野湾市議などへのヒアリング

ヒアリングの狙い

・基地によって発生している諸問題（騒音問題、墜落事故、米兵による犯罪など）につ

いて実際に基地に近い反対派の住民たちおよび関係者から話を聞くことで普段メディアだけでは知ることができない本当の思いを知る機会とし、改めて基地問題に向き合うための鍵とする。

ヒアリングの感想および研修に参加した感想

・今回私が実際に沖縄へ自ら赴き、ヒアリングをして特に良かったと思うことは現地に行く前よりも沖縄の基地問題に対するイメージがより明確になったことでさらにこの問題に真摯に向き合えるようになったということである。これは私の研修の目的であった「基地によって発生している諸問題について実際に基地に近い反対派の住民たちおよび関係者から話を聞く　　ことで普段メディアだけでは知ることができない本当の思いを知る機会とし、改めて基地問題に向き合うための鍵とする。」をしっかりと果たすことができる良い研修だったということにもつながる。百聞は一見に如かずとよく言われるが、もし迷っている人がいれば、ぜひ参加することをお勧めする。写真や動画で基地などを見るのと、実際に現地に行って自分の目で見たり、当事者から話を聞くのとでは、実際に体験した私から言わせていただくと雲泥の差があり、印象が大きく変わるきっかけにつながるからである。

次期参加者へのアドバイス

・アドバイスは大きく２つある。一つ目は自分が本当に興味を持つことができることについて調査することだ。この理由としては何も考えず、適当に自分が興味、関心のない研究テーマで始めると恐らくどこかで妥協が入ってしまうからだ。私の考えとしてはせっかく勇気を出して参加を決め、高い研究費を払うのにも関わらず、本気で取り組まないのはあまりにももったいないと感じるからである。2 つ目は分からなくても放棄せず、先生や他の参加者に聞いてみることである。幸いにも研修に関わる先生方は何かわからないことがあれば、非常に優しく丁寧にアドバイスしてくれる。また、他の参加者に聞いてみることで自分では思いつかなかった考え方を発見するきっかけにもなるだろう。

■緑ヶ丘保育園・普天間第二小学校保護者ヒアリング

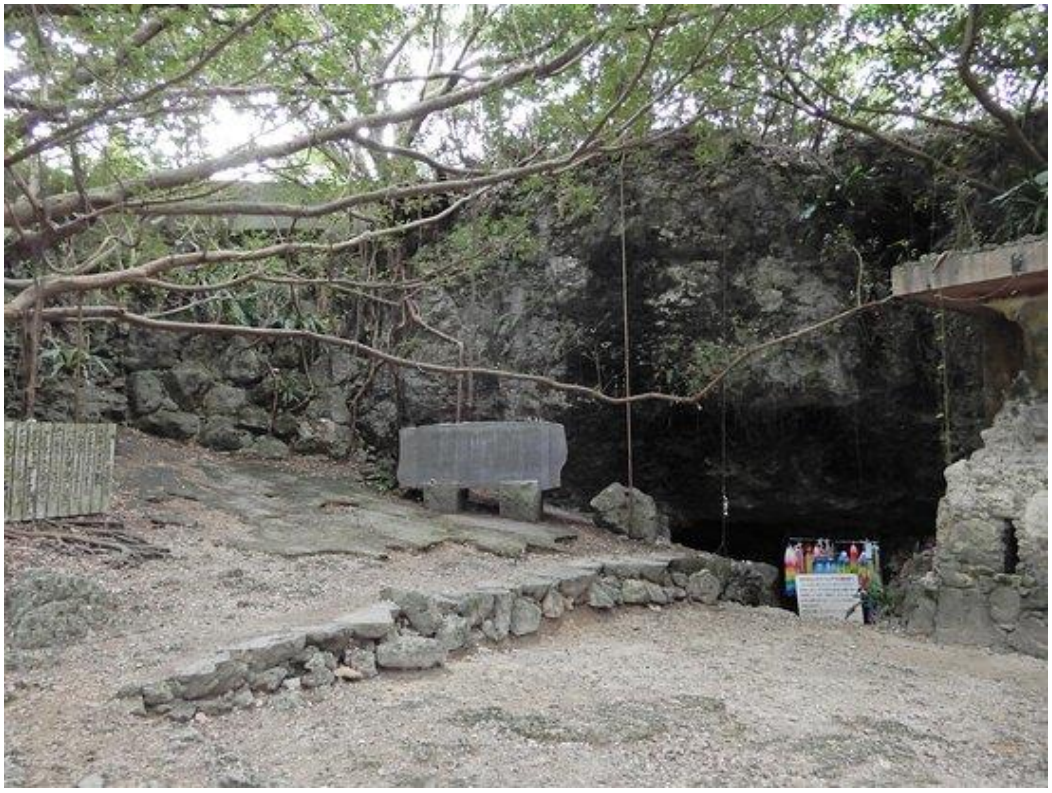
ヒアリングの狙い

・ヒアリングの主な内容は事件が起きた時の様子、事件発生後、そして現在の心境である。また、ヒアリング後、普天間第二小学校のグラウンド視察に向かった。屋根付き避難所はグラウンドの左右に設置され、例えるならサッカーゴールのようだった。子供達がのびのび自由に学べる環境づくりはこんなにも難しいものなのかと痛感した。東京で暮らしているだけではわからない、沖縄の「今」を知ったヒアリングであった。

参加者へのアドバイス

・ニュースや新聞からだけでは伝わらない、生の声を聞ける経験は滅多にありません。実際今回のヒアリングで、基地の話や落下物の話はお母さん同士では話さないとおっしゃ

っていました。やはりいろんな人がいて、いろんな考えを持っているからこそ気軽に話せないということなのだと思います。アクティブラーニングは自分の知らない本当のことを知れるチャンスです。「こんなこと聞いたら失礼かな」と思う必要はありません。事前学習で疑問に思ったこと、実際ヒアリングをしていて気になったこと、たくさんのことを学んでください。その土地の温かい人、美味しいご飯、美しい景色を仲間たちと存分に楽しんでください。きっと学生生活の思い出に残ると思います。



■前田高地視察

・1945 年 4 月 8 日から 23 日まで戦闘が行われた前田高地は沖縄の南部にあたる。アメリカ軍は４月９日には嘉数を占領することを目標としていたため、損害を省みず続々と部隊を投入したことから激戦になった。戦いの序盤では白兵戦（刀などの近接武器での戦闘）が激しく行われ、奇襲を仕掛けた米軍を撃退したものの、日本軍も壊滅的な被害を負った。中盤戦になると米軍は戦力を増強し、戦車の投入をして終盤の戦いに備えた。日本軍も終盤に備え準備を進めたため、これといった激しい戦闘は起こらなかった。

・まず、前田高地内にある浦添グスク・ようどれ館にて資料を見学。琉球王国時代の出土品や資料、浦添グスクの西室を実寸大で再現した部屋もあり貴重な資料をいくつも見学することができた。

◂ハクソー・リッジから見下ろす景色

・自衛隊の方達に案内をしていただき前田高地を散策。事前の説明の通り草むらの中を歩き、慰霊碑や戦闘時に使用されていたガマ、沖縄独特のお墓である「亀甲墓」などを見学した。沖縄では本州とはお墓の文化が異なり、「亀甲墓」はお墓の前に広いスペースが設けられ、旧盆などに家族が揃い宴会を開く文化があると教えていただいた。

・しばらく進むと浦添グスク跡地に到着し城跡を見学した。その後映画の舞台にもなった「ハクソー・リッジ」を見学した。写真で見るよりも崖がもの凄く高く感じ、角度もほぼ直角であることに驚かされた。

・前田高地下には「カンパン壕」・「缶詰壕」という食料を保管するための壕があり、視察時には雨が降っていたためか壕内部まで水で満たされてしまっていた。戦時中も同様であったかは定かではないが、このように水が溜まってしまうようでは食料を保管出来ていたのか疑問に思った。

浦添グスク跡▸

■海軍司令部壕視察

昭和 19 年（1944 年）日本海軍設営隊（山根部隊）によって掘られた司令部壕。現在の豊見城市に位置。カマボコ型に掘り抜いた横穴をコンクリートと杭木で固め、米軍の艦砲射撃に耐え、持久戦を続けるための地下陣地で、4000 人の兵が収容されていた施設。戦後に発見された遺骨の数は 2300 名以上とされた。

司令官の大田実は壕の幕僚室で 6 月 13 日に自決をした。 6 月 6 日に海軍次官宛てに発信した電報「沖縄県民斯ク戦ヘリ　県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ワランコトヲ」は当時の訣別電報の常套句だった「天皇陛下万歳」「皇国ノ弥栄ヲ祈ル」などの言葉を使用せず、ひたすらに沖縄県民の敢闘の様子を訴えているものであった。

到着後、最初に海軍司令部壕の敷地内に建立されている慰霊塔に参拝。壕の中に入る前に資料館を見学。実際に使用された銃剣や手榴弾などの武器をはじめ、軍服や隊員の手紙など

さまざまな資料が展示されていた。中でも資料館の入り口に大きく展示されていた大田実司令官が残した「沖縄県民斯ク戦ヘリ」から始まる有名な電報が印象に残った。また、数々の当時の写真には凄惨な写真も含まれており戦争のむごたらしさを再度実感した。

壕の中に入ると第一に感じたのはもの凄く湿度が高いことであった。当時もこの状態で4000 人もの人間が生活していたことを考えると生活環境は最悪なものだと想像することができた。手彫りの壕のため壁などはいびつな形をしており、通路も広くなく全体的に圧迫感を感じた。

大田実司令官が自決した幕僚室では炸裂した手榴弾の破片の跡が壁に広がっており、手榴弾の威力を感じると共に、大田実司令官の自決時の覚悟は相当なものであったのだろうと感じた。

そのほかにも医療室や下士官兵員室などの通路に面した広いスペースも数箇所あり、立ち入りができない場所も含めるとかなりの面積であった。この広い面積を手彫りで掘削することは大変な重作業であっただろうと思った。実際に使用されていたピッケルなどの掘削道具も展示されていたため、これでここまでの施設を作り上げたのかと驚いた

■元 Stars and Stripes 記者ヒアリング

ヒアリング内容

私たちは、あらかじめ作成していた質問表に記載されていたものを回答していただく形式でヒアリングを行った。記者をやってく中で心が打たれたできごとして、1995 年の出来事を挙げられたことが印象に残った。また、記者として記事を書く上で心掛けてきたこととして、米軍の新聞というけれども、ジャーナリズムとしてのきちんとした意見があり、きちんとした意見を、ジャーナリストとして正しいと信じるものを提供する、それが事実を嘘なく伝えるジャーナリズムの仕事であると言っていたこと、だから沖縄の声がどこまで届いているかも考え、米軍の訓練の通告なども本土の中ではしっかり行っているのに沖縄ではそうではなく、これが県民の納得のいかない一つの理由であり、辺野古がこういった沖縄の声のシンボルだと考えているという話も印象深かった。また、2004 年に沖縄国際大学にヘリが墜落した時は、足を震わせながら取材したという。

ヒアリングの感想および研修に参加した感想

今回、沖縄について知らないことがたくさんあった中で、事前学習など、そういったところから沖縄に触れる時間があったが、沖縄に行って現地の人たちの話を聞くというこのような機会が一番自分の中に沖縄の問題や可能性が染込んでくる時であった。その時、そ

の場所で過ごしてみないとわからないことや沖縄の人の直接的な訴え、政府に望んでいることや立場によって様々な感じ方や捉え方です。特に、ジャーナリストの方からのお話を聞いてみて、沖縄の問題は沖縄県民だけの悩みであってはいけないなと強く感じた。日本中の一人一人がもっと向き合うべき課題であり、それが今回ヒアリングに参加した自分の望みとなった。少しでも多くの人に、最初は小さなことでもいいので、少しずついろんな人が沖縄に関心を持ってくれればと思っている。

次期参加者に対するアドバイス

現地に行って得られるものは得別なものばかりです。下調べ、知識ゼロのところからスタートしますが、その倍に感じるもの、普段の生活では決して知ることができないものを経験させていただきました。こういったプログラムに参加できたことがとても光栄です。ぜひ参加してみてください。参加することで人として、日本の一人として、大切な事を学べます。

■おわりに

本報告書は、2019 年度「現代政治のイッシュー（国内外喫緊の政治的諸課題ＡＢ）」で沖縄現地研修に参加した学生による自身が学習したことの記録である。

「現代政治のイッシュー」は、現地研修のための事前学習、現地研修、研修報告書の執筆という三つの段階から構成される。現地で初対面の学生のために時間を割いて自らの経験や思いを語ってくださる沖縄の人びとに話を聞くという体験、あるいは史跡・戦跡を視察するという体験を意味あるものとするには、相当の準備が必要になる。前期を費やして、参加学生には担当する視察・ヒアリング先に関して事前調査をし、ヒアリングの質問項目と現地に持参するパンフレットを作成してもらった。講演や講義と異なり、話を聞いてから質問を考えるのではなく、自分の問題意識を明確にし、聞きたいことを具体的な質問にして先方にお伝えしなければ話が聞けないという経験は、参加学生にとって相当大変だっただろうが、よく取り組んでくれていた。

現地では、事前学習の成果である分厚いパンフレットを持ち歩きながら、ヒアリングや視察を行った。史跡・戦跡が伝える沖縄の歴史、沖縄の人びとの話を聞くことで見えてくる複雑な現実、「沖縄の」問題が自分と無関係ではない「日本の」問題であること、提出してくれた報告書を読むと、こちらが思う以上に参加学生は現地で色々と感じ、考えていたのだと思う。また、今回の研修では、できるだけ公共交通機関を利用するようにした。早朝走っていた学生もいて、沖縄の街の中をバスに乗ったり歩いたり走ったりすることで感じられたこともあったのではないか。そのような感覚も大切に覚えていてもらいたい。

後期に入り、最後の段階としてこの報告書を書いてもらった。自分が現地で見聞きしたことの意味を振り返り、再検討し、言語にして伝えることは悩ましく難しい作業だが、記録にすることで経験し、考えたことが残っていく。参加学生には自分が残したことの意味を改めて感じ、大切にしてほしいと思う。

最後に、沖縄研修の内容の濃さは、現地でご協力いただいた方々によるところが大きい。この現地研修でご協力いただいたヒアリング・視察先の皆さま、またご同行頂いた自衛隊東京地方協力本部北地域事務所に心より御礼申し上げたい。

（文責・武田、藏田）

おことわり

ヒアリング対象者の個人名や詳細な内容については一切お答えできません。